

F・ベーコンの倫理思想 (I)

—前期思想形成における倫理的関心を中心に—

森 園 節 生

われわれは、これよりF・ベーコン (Francis Bacon, 1561—1626) における倫理思想につき、若干の考察を試みるわけだが、そのさい、われわれは、思想形成史的視点よりアプローチする方法を取ることにはしたい。そして、その作業を通じて、われわれは、ベーコンを一貫する倫理思想を確認することによって、第一には、従来の倫理思想史上におけるベーコン評価に対し、出来れば多少の修正を試みたい。また、第二には、ベーコンにおける倫理と科学の問題に照明を与えることにより、出来れば、ベーコンのもつ現代的意義についての再検討を、期待したい。

われわれは、まず本小論を第一部として、とりあえず前期思想における倫理的関心を取り上げることにはしたい。以下、ベーコン思想の概観から始めることにしよう。

I

F・ベーコンと言え、偉大な人物の多くがそうであるごとく、一人の偉大な矛盾の人、偉大な多義的人物、さらには一人の偉大な両義性の人であった。彼は、個人としては、作家、詩人、弁護士、廷臣、政治家、哲学者、実験的科学家、の何れでもありながら、しかも、決してその何れにも納りきれなかった。またその思想にあっても、学問・科学における進歩性と政治社会における保守性、キリスト教的信仰と唯物論的自然科学的関心、帰納法の主張と量的測定⁽²⁾の無視、發明発見への志向と現実の自然科学的業績の無視、実験の提唱と「エッセイ」の執筆、等の両義性を免れていない。さらに、人格的にも、大法官という地位と汚職事件、女王エリザベスおよび国王ジェームス一世への忠勤とパトロンであり友人であったエセックスへの裏切り、等多くの矛盾をもつ。したがって、彼の時代よりこのかた、今日にいたるまで、ベーコンへの評価はまちまちであり、一通りではない。しかし、考えてみれば、まさにこの点にこそ、彼の偉大さがあつた、と言えないことはない。レオナルド・ダ・ヴィンチを見るまでもなく、彼ベーコンにおいても、かの偉大な時代の一典型としての「普遍的人間」 (uomo universale) を見ることができのではなからうか。何れにしても、彼はイギリス・ルネサンスの最大の思想家の一人であり、中世的世界像の解体と「時代の雄々しき誕生」⁽³⁾ (Temporis Portus Masculus) という近代の夜明けとの交錯する転換期に、近代を指向し、さらにはるかに現代をも遠望した一人の偉大な思想家・哲学者であったことは、まちがいない。

現代哲学者B・ラッセルは、ベーコンの哲学について、「多くの点で満足すべきものではなかったけれども、彼は近代の帰納法の創始者として、また科学的な手続きを論理的に組織化する試み⁽⁴⁾での開拓者として、ゆるぐことのない重要性を持っている。」と評価を下している。ラッセル

の言に代表されるように、従来の哲学史的定説によれば、ベーコン評価の鍵は、論理学者、帰納法創始者、科学方法論者という一点に集中されていたきらいがあった。つまり、認識論的、科学方法論的視線に把えられたベーコン像こそ、ベーコンの真の姿と考えられていたと言える。たしかに、ベーコンのモットーは、周知のごとく、「知は力である」(scientia est potentia)⁽⁵⁾であった。ベーコンにとって、知 (scientia) はそれ自身、目的ではなく、人間に力 (potentia) を与える有効な確実な手段としてのみ意味があるのであり、われわれは自然に服従して、その真相を見きわめること——つまり知——により、かえって自然を支配する——つまり力となる——ことができる、と考えられた。彼はかかる知識獲得のために二つの手続きを導き出す。一つは、消極論としてのイドラ (idola)⁽⁶⁾ 論であり、一つは積極論としての帰納法 (inductio) である。イドラとは、要するに、われわれの落入りやすい幻像、すなわち偏見や先入観であり、したがって、自然の法則を素直に受入れるためには、まずこれを追放しなければならない。次に、かかる偏見を捨てて自然に向うには、アリストテレス的スコラの演繹法とは異なる、個別的事例より一般的事例を引出す方法が必要となる。それには、観察と実験により多くの事例 (iwstantie)⁽⁷⁾ が集められなければならない。しかも、そのさい単なる肯定的事例 (積極的事例) のみならず、否定的反証の事例 (消極的事例) も忘れてはならず、さらには比較的事例も集められねばならない。この三つの事例をつき合わせるにより、始めて事物の本質的原因がつきつめられる。ベーコンにより、この原因は「形相」 (forma) と呼ばれ、事物それ自身の「法則」 (lex) と言われる。かくて、ここにベーコンの言う、自然探究における新方法としての帰納法が完成する。また、ここに「発見と発見の時代」の子としてのベーコンにおける、発明発見の論理としての近代自然科学の技術的方法への指向、という彼の基本的姿勢の一つを見ることができる。⁽⁸⁾

たしかに、上述の考えを主張することによって、ベーコンが近代論理学の改造に一応成功していることは、何人もこれを否定することはないであろう。しかし、「人間生活の物質的諸条件の改革者ベーコンを、帰納法についての諸法則の改革者ベーコンというアカデミックな人物に仕立ててその光彩をうばったために、イギリスにおけるベーコン研究は破滅した。」⁽⁹⁾と、反論されるように、たしかに彼の著作をつぶさにひも解いてみると、論理学者ベーコンのイメージとは全く異なる彼の姿にも接することができ、先のイメージは、実はベーコンの一つの局部的イメージにすぎないのではなかろうか、という疑問に誘われるのもまた事実であろう。実は、彼の最後の未完のプログラムである「大革新」 (instauratio magna) の構想からすれば、「帰納法の改造はたんに論理学改造の一部にすぎず、論理学の改造はまたベーコンの究極の目標だった、知識の『革新』の一部にすぎないのである。」⁽¹⁰⁾ 今日では、旧来のベーコン像と全く別のベーコン像が打ち出されてきている。つまり、ベーコン像における局部より全体への転換が行なわれてきた。かかる転換は、1961年というベーコン生誕400年を期して、その数年前より、世界的規模で始ってきた。つまり、1946年のF・アンダーソンの研究を始めとして、B・ファリントン、P・ロッシ、J・G・グローサー、C・ヒル、K・R・ウォーレス等の相次ぐベーコン研究により、まさにベーコン・ルネサンスと言ってよいほどの、ベーコン再発見・再評価の花々しき業績が続出し、それによってかつての「論理学者ベーコン」一辺頭というベーコン像に代って、最近では、

「産業科学の哲学者」⁽¹²⁾、「人間生活の物質的諸条件の改革者」⁽¹³⁾、「最初の近代科学の政治家」⁽¹⁴⁾、あるいは、「人間精神諸能力の分析家としての人間学者」⁽¹⁵⁾、「産業革命の知的起源者」⁽¹⁶⁾、「計画科学の開拓者」⁽¹⁷⁾、としてのベーコンという新しきベーコン像が提出されてきている。

本小論も、実は言うまでもなく、以上の最近のベーコン研究の業績に助けられつつ、彼の倫理思想の意義を探ろうというものである。

- (1) 前期思想の「前期」のカバーする時期は、ベーコンの大学入学の1573年よりエリザベスの死の年であり、またベーコン回心の年である1603年までとする。ちなみに、その後の時代区分は、中期思想の時代を、1603年から1609年まで、後期思想の時代を、1609年より1626年までとしたい。その区分の根拠は、第1の切れ目の1603年におけるベーコンの回心を重要視することと、第2の切れ目を1609年としたのは、1603年から1609年への彼の仕事が、ベーコン哲学の完成に重要だという、ファリントンの考えを採用したためである。(ref. B. Farrington, *The Philosophy of F. Bacon*, 1964. Liverpool Univ. Press.) 管見によれば、上田教授は三分法(上田泰治『ベーコン』牧書店 昭和39年(世界思想全書)、この本によれば上田教授は A. F. Cresson によったとのことである。ただし、中期と後期との切れ目を1621年としている)を採用し、A. W. Green は五分法、C. D. Bowen は四分法を採用しているが、何れもその時代区分の根拠をベーコン個人の外的事件に求めている、思想の見地からは行っていない。ref. O. C. D. Bowen, *F. Bacon: The Temper of the Man*, Hamish Hamilton, 1963. O. A. W. Green, *Sir F. Bacon*, 1966. (Twayne's English Authors Series) なお、本小論におけるベーコン思想の三分法は、それぞれ、前期は胎動期、中期は形成期、後期は大成期と言って良い。
- (2) ベーコンは、ガリレオ・ケプラーの業績はもとより、当代の同国人たる J. ネピアー(対数)やW・ハーヴェ(血液)の業績も無視した。
- (3) 言うまでもなく、1603年頃のベーコンの習作の題名。B・ファリントンによって、その新訳が発表されている。B. Farrington, *ibid.*, PP. 59
- (4) B. Russell, *History of Western Philosophy*, 1962. G. Allen & Unwin, P. 526 (市井訳『西洋哲学史・』199頁 みすず書房 昭和34年、ラッセル著作集第13巻)
- (5) 正確には、「人間の知と力とは一致」(*scientia et potentia humana in idem coincidunt*)という表現である。F. Bacon, *Novum Organum*, *The Works of Bacon*, Bd.I, P. 157 & Bd. IV. P. 47 (Faksimile-Neudruck der Ausgabe von Spedding, Ellis and Heath, 1857~1847, Friedrich Frommann Verlag, 1963) なお以下において、ベーコンよりの引用、およびスペディングよりの引用は全て、この全集版による。(以下、単に Works と略記する。)
- (6) 言うまでもなく、*idola specus*, *idola theatri*, *idola fori*, *idola tribus* の四つをさす。
- (7) ①積極的事例 (*positive instances*) たとえば、熱の存在する多くの事例。
②消極的事例 (*negative instances*) たとえば、熱があるように見えながら熱の存在しない事例。
③比較的事例 (*comparative instances*) たとえば、ある現象とともに、熱が上下するとき事例。
- (8) 拙稿『フランシス・ベーコン』(『道徳と教育』第74号 昭和39年7月号) 参照。
- (9) B. Farrington, *F. Bacon: Philosopher of Industrial Science*, 1961. Collier Books, (1st Edit. 1949), P. 137 (松川・中村訳『フランシス・ベーコン』230頁 岩波書店 昭和43年)

- (10) P. Rossi, F. Bacon : From Magic to Science, translated from the Italian, Francesco Bacone : Dalla Magia Alla Scienza, by S. Rabinovitch, (Routledge & Kegan Paul), 1968, P. 38. (前田訳『魔術から科学へ』171頁 サイマル出版会 昭和45年)
- (11) ①F. H. Anderson, The Philosophy of F. Bacon, The Univ. of Chicago Pr. 1948
 ②F. H. Anderson, F. Bacon : His Career and His Thought, Univ. of Southern California Pr. 1962
 ③B. Farrington, (9)と同じ。
 ④B. Farrington, The Philosophy of Bacon, Liverpool Univ. Pr. 1964
 ⑤B. Farrington, F. Bacon : Pioneer of Planned Scince, Weidenfeld & Nicolson, 1963(Pathfinder Biographies)
 ⑥P. Rossi, (10)と同じ。
 ⑦J. G. Growther, F. Bacon : The First Statesman of Science, The Cresset Press, 1960
 ⑧C. Hill, Intellectual Origins of the English Revolution, Oxford Univ. Pr. 1965 (福田訳『イギリス革命の思想的先駆者たち』岩波書店 昭和17年)
 ⑨K. R. Wallace, F. Bacon on the Nature of Man, Univ of Illinois Pr, 1967
- (12) (11)の④
 (13) (11)の④
 (14) (11)の⑦
 (15) (11)の⑨
 (16) (11)の⑧
 (17) (11)の⑤

II

ベーコン思想の胎動は、彼の12才3ヶ月のおり、1573年4月の、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジの入学から始まる。当時のケンブリッジ大学の教育は、まだ中世以来の活気なき状態であり、アリストテレス・スコラの哲学が有力であった。たまたま、彼が在学中であった、1572年11月のある日、突如としてカシオペア座に新星が出現し、翌々74年3月のある日に、この星はこれまた突如として消滅し去った。ところが、権威者アリストテレスの学説によれば、カシオペア座は絶対変化不可能と考えられていた星座域であった。⁽¹⁾ おそらくこの一事件は、少年ベーコンに、権威の何たるかを充分悟らせたにちがいない。

ベーコンの秘書兼私設牧師でありかつ友人であり、しかも遺稿編輯者でもあったW・ローリーが、その短かいベーコン伝の中で、「ベーコン卿が、よろこんで私にもらしたことであるが、はじめてアリストテレス哲学をきらいになったのは、大学の在学中、16才頃のことであった。それは著者(アリストテレスのこと)の無価値の故ではなく、——卿はいつも著者のうちに、あらゆる偉れた性質を認めていた——その方法が不毛(unfruitfulness)であるがためであり、つまり卿がいつも言っていたことだが、論争や論戦に強いだけで、人間生活のための仕事の生産という

点で不妊の哲学 (barren [Philosophy] of the production of works for the benefit of the life of man) であるからである。卿は、この考えを死ぬまで持ちつづけていた。⁽²⁾と伝えている。ベーコン伝の決定版を書いた J・スペディングもこの点に注目して、「私はこの事をベーコン生涯の最重要事件と見做すべきだと信ずる。この事件こそ、他のどの事件よりも、彼の性格とその後の進路に大きな影響を及ぼしている。⁽³⁾」と附言する。スペディングも、ここにベーコン思想のほう芽を認める。さらに、スペディングによれば、在学時におけるベーコンの最大関心事は、宗教、祖国、人類の未来の三つであったという。またファリントンも、「この事は、全生涯のコースを決定づけた道徳的見識という青春のモーメントの一つであった。この点を見誤れば、その人(ベーコンのこと)を見誤ることになる。⁽⁴⁾」とさえ断言している。

ここに、われわれもまた、ベーコン思想の胎動を認めねばならない。これ以来、彼の思想を一貫する「革新」の気概を、早くも見出すことができる。少年ベーコンの当代学問への批判、それは直接的にはアリストテレス・スコラという中世的学問に向けられたものであるが、そのさいの批判の要点は、アリストテレス哲学の全くの否定ではなく、その学問のいさぐさ方法と、そして目標についての不満であった。「その方法の不毛……論争や論戦に強いだけで、人間生活のための仕事の生産という点で不妊」という批判は、実はベーコンの基本的姿勢から発せられたものにはかならない。人類の将来のため、理論的静観的学問ではなく、それに代えるに実践的学問をもつてしなければならないという彼のライトモチーフの登場が、そこにはある。過去の学問の清算には方法の不毛を正さねばならないということ、そしてさらには、「何に向って」正さねばならないかという目標に関して、それは人間生活の利益のためという解答が出されていることを、認めねばならない。前者は、ベーコンの革新への指向を示し、後者は、彼の思想の道徳的動機、言いかえれば、彼の思想の出発時における倫理的関心の所在を明かにしている。そしてこのことは、彼の思想を一貫する、論理・方法・実験・学問の革新——もし、これを第一主題というならば——と、人類生活の将来改善という倫理的関心——いまだ、思想にまでは固っていない——という第二主題が、同時併列的に登場している点は見落せないことである。少年ベーコンは、いかにも若々しく、理想主義的な人倫的関心から、その革新の歩みを始めていることを見逃すことはできない。

先の注で断っているように、ベーコンの前期思想のカバーする年代は、1573年から1603年までの、およそ20年の間である。上述の出発から、彼ベーコンはいかなる道を歩んだか。その外面的生涯を少し眺めておこう。高官である父ベーコンの末子という宿命から、子ベーコンはケンブリッジを、学位を得ないまま、1575年12月に立ち去ることになる。その後の彼は、父ベーコンの敷いたエスカレーター・コースに乗り、ひたすら栄達の道を歩むかに見えた。76年の名門法学院たる「グレイ学院」(Gray's Inn)への入学、76年から79年にわたるフランス留学が相次いだ。79年の突如として訪れた父の死、帰国とベーコンの身边はめまぐるしい外的変化が訪れた。父の死以後は、ベーコンはたえず経済的不如意におそわれ、その環境を打破するための就職獵官運動に明けくれる失意の日々が訪れる。わずかに、84年よりの一介の議員生活のみが支えであった。そのうちに、最後の頼みとしてのエセックスとの交友も、彼の失脚のため夢敗れ、1603年のエリ

ザベスの死まで、不遇の時代が続いた。この年までの、ベーコンの生涯の外的変化の大すじは、およそこうである。この時期は、ベーコンにとって、模索、彷徨、試行そして生活の時代であった。

反面、この間の内面の歴史、精神の歴史はどうであったか。この20年間の内面の歴史を伺う時、われわれは1597年の処女作『エッセイ』を境にして、前半と後半とに細分することができる。前半、つまり76年から97年までの約10年間は、著述の上からいっても、決定版『ベーコン全集』⁽⁶⁾のいわゆる文芸的作品、職業的作品（つまり、政治的、時務的論文）には注目すべきものがある⁽⁷⁾とは言え、思想的・哲学的著述はきわめて限られている。著作の歴史から見ると、まず85年の『偉大な時の誕生』⁽⁸⁾（Greatest Birth of Time）が目立つが、実はこれは名前のみで、現物は散逸していて、わずかに題名より考えて、後の『時の雄々しき誕生』（Temporis Partus Masculus）の先駆と想像ができるにすぎない。この間のベーコンの思想を伺い知ることのできるのは、ファリントンにより、「パーリー卿にあてた手紙と、1592年および1594年の『仮面劇』のために書かれた諸作品とは、成年時代の初期のベーコンがひそかにいただいていたかぎりでの彼の⁽⁹⁾大志、つまり彼の偉大な思想を具現している」と言われるものしかない。第一のものは、おそらく91年か92年のある時、おじである大蔵大臣パーリーに、いろいろな懇請をしている手紙のことであり、その中でベーコンはいつしか自分を語りだして、「最後にわたしは、控えめな市民としての諸目的とならんで、膨大な思索上の諸目的（vast contemplative ends）をもいただいていることを告白いたします。と申しますのは、わたしはすべての知識を自分の領域と考えてきた（I have taken all Knowledge to be my province）からであります。そしてもしわたしが二種類の海賊、すなわちその一つはとるにたりない論争や、反論や多弁をこととし、（筆者注。アリストテレスを指す、さらには古代ギリシャ哲学を指す。）他は盲目的な実験や秘伝や詐欺をこととし、（筆者注。アルケミー、あるいは魔術を指す。）それによって数多くの略奪をおこなってきた二種類の海賊を知識の領域から放逐することができますなら、わたしは勤勉な観察や、根拠ある結論や、実益のある⁽¹⁰⁾発明や発見を導入し、この領域の最上の状態をつくりだしたいと思っています。これが好奇心（curiosity）であろうが、むなしい栄光（vain glory）であろうが、自然（nature）であろうが、あるいは（ある人が好意的に考えてくれて）博愛（Philanthropia）であろうが、ともかくそれはとうていとりのけられぬほど固くわたしの心に定着しているのです。」と告白している。ここに、われわれは前期思想の一つの結晶を見出すことができるし、またそれはすでに、後期思想にびたりと正確な照準をつけている事に気がつく。また、先にふれた第一主題と第二主題の結合さえも確認することができよう。ただ、まだそれはあく迄も照準であり、指向であり、中身は今後のベーコンに委ねられている。

第二のものは、1592年の女王誕生日のさいの仮面劇、いわゆる余興のための趣向（device）の劇作のことである。これは草稿が保存されていて、『知識を称賛するベーコン氏』⁽¹¹⁾（Mr. Bacon in Praise of Knowledge）と題されているものである。ここには、ベーコンの奇知と機知が十分に発揮されているものだが、古代の学問にふかれて、やや皮肉に「学識ある人々のあらゆる論争を、⁽¹²⁾従来未知であった自然の効果をなの一つとして明かにしえなかった。」と言う。

第三のものは、1594年のグレイ法学院のクリスマスの仮面劇の作品のことであるが、ファリントンによれば、⁽¹³⁾ 仮面劇の王子の答申に詫して、後の『新アトランティス』の構想を早くも打ち出している、とのことである。

これをみても、すでにこの頃のベーコンは外面は不遇の日日にありながら、先の「膨大な思索上の諸目的」のために、思索を重ね、蓄積を続けていたことを想うかべることができる。しかし、構想は徐々に発酵していたかもしれないが、まだ醸造されてはいなかった。これまでの期間にあっては、第一主題、第二主題の登場が高らかに宣言されたものの、どちらかと言えば、第一主題の構想が徐々にふくれ上り、具体化されてきている反面に、第二主題である倫理的関心の方は、一貫されてはいるものの、一向に進展を見ることは少い。この面での高まりは1597年までまたなばけれならなかった。

(1) A. Weigfall Green, Sir F. Bacon, 1966, (Twayne's English Authors Series 40) P. 26 による。

(2) W. Rawley, The Life of the right horonable F. Bacon, 1657. (Works, Bd. I. P. 4)

(3) J. Spedding, The Letters and the Life of F. Bacon, 1861. Vol. I, (Works Bd. VIII. P. 4)

(4) J. Spedding, Ibid., P. 5

(5) B. Farrington, The philosophy of F. Bacon, 1964, Liverpool Uinv. Pr. P. 30

(6) 前述注 I の(5)参照

(7) たとえば、次のものがあげられる。

1589 An Advertisement touchng the Controversies of the church of England.(出版は1640年)

1592 Certain Observation made upon a Libel published this present year 1592. (出版は1593年)

1594 A Ttrue Report of the Detestable Treason intended by Dr. Roderigo Copes (出版は1657年)

(8) 前述注 I の(3)

(9) B. Farrington, F. Bacon : Philosopher of Industrial Science, 1961, P 37 (Collier Books) (松川・中村訳『フランシス・ベイコン』47頁 岩波書店 昭和43年)

(10) J. Spedding, Ibid., P. 109 (Warks VIII) 及び前注(9)の本を参照。

(11) J. Spedding, Ibid., P. 123~P. 126 (Works VIII) 及び前注(9)の本を参照。

J. Spedding, Ibid., P. 124 (Works VIII) 及び前注(9)の本を参照。

(12) J. Spedding, Ibid., P, 124

(13) B. Farrington, Ibid., P. 37~P. 38 (同訳 44頁—46頁) 参照。

III

1597年、彼の処女出版として、『エッセイ』——より正しくは、『エッセイ』第1版——が上梓された。⁽¹⁾ 著作家ベーコンの誕生である。これには、三つの作品が含まれていた。

第1作品である『エッセイ』は、言うまでもなく、彼の作品の中で、もっともポピュラーな作品であり、一般には彼の文芸作品として、あるいは作者自身がモラリストとして大衆に語りかけた教訓の書として、比較的気楽にうけとられている。第2版『エッセイ』がささげられるはずで

ありながら、不幸にして上梓を前に亡くなった、皇太子ヘンリーへの献辞——したがって未発表のまま、原稿として現存——の中で、ベーコン自身が、「私は短い覚え書きのようなもの (certain brief Note) を書こうといたしました。物好きというより意味深いもの (rather significantly than curiously) を書き止めようとし、それをエッセイと呼びました。……私の願いとしましては、それが塩の粒 (grains of salt) のようなものであり、食慾をそそらせるが、お飽きになることのないものにしたいのであります。そして人々の生活と、その筆が一番親しんでいるものを扱っております。……その性質は人が体験に見出すことが多く、書物には珍しいようなものであります。」⁽²⁾と説明している。また、ベーコンは後年、自らの著作活動について語るおりに「私のエッセイについて言えば、私はそれを他の研究の気晴し (recreation) と見做している。」⁽³⁾と発言している。また先の献辞の中で、エッセイの典形として、セネカのルキリウス宛書簡を上げて、「それは書簡の形式で伝えられているが、とりとめのない瞑想 (dispersed meditations) ⁽⁴⁾であり、エッセイにはほかならない。」⁽⁵⁾と言う。ベーコン自身の言によれば、彼にとっての『エッセイ』は第一に、「その他の研究の気晴し」の位置を占むるものであり、第二にその内容は、「人々の生活と、その筆が一番親しんでいるもの」、「人が体験に見出すことが多く書物には珍らしい」ものであり、第三には、それは物好きというより、意味深いもの、であり、「短い覚え書き」、であり、「とりとめのない瞑想」の書ということになる。

ところで、われわれ自身が直接ちに『エッセイ』にふれ、特に各版の異同、とくにその題材とその内容の訂正増補等について精査してみると、どうもベーコン本人が言っているような、「気晴し」、「とりとめのない瞑想」という表現は、そのままでは受けとれなくなってくる。ベーコン本人にとっては、たしかに主観的には「気晴し」であり得たかも知れないが、実は意外にその裏にはベーコンの全思想が潜んでいることに気がつく。『エッセイ』は、他の公刊された彼の著書と同様に、切り離して単独に読まれるべきものではない。

原エッセイともいえる第1版(1597年版)とエッセイ第2版(1612年版)およびエッセイ第3版(1625年版)を対比してみると、まず目立つのは、表現の形式という外面上の違いである。第一に、各版の集録するエッセイの篇数が異う。すなわち、第1版は10篇、第2版はおよび第3版は、それぞれ40篇、⁽⁶⁾48篇、からなっている。これは、ベーコン自身の人生の年輪の増加とともに、あつかうべき人生の体験が増加したという、自然を物語ることであろう。第二には、文体の相異である。前者においては、一つ一つの篇が全くアフォリズムの集成から成り立っているのに対し、後者は、各篇がまとまった論述の形をとってきている。後に彼は、知識の伝達の二方式として、体系式とアフォリズム式の対比を試み、しかもアフォリズム式に軍配を上げる論議の中で、「アフォリズム式のものうちにもられるべきものは、ある適量の所見だけであり、したがって、健全で、しっかりした基礎のあるひとでなければ、何人もアフォリズムを書く資格はない。」⁽⁷⁾と云っているように、またたしかに「アフォリズム式のもの、断片的な知識を示すので、⁽⁷⁾いっそう深く研究をするようにと人びとをいざなう」という長所がある。じじつ、『新機関』もこの形式であった。しかし、第2版以後はこの方式を止めた。この表現の変化はエッセイというものの表現に対する見解の変化を意味するが、それよりも、後述するごとく、第2版以後のエッセイ

セイはの表現の変化は『学問の前進』(1605年)との調整の必要から生じたことであろう。第三には、表現のニュアンスの変化である。つまり前者にあっては、やや抽象的形式的なスタイルが強く、また事柄、事件、術語についても具体性が欠けている。これに対し、後者になるにつれ、スタイル全体が具象化してきて、鮮明になってくる。また修辞上から見ても、後期ほどメタファーが増え、比較対象、歴史的例証の例が増えてくる。これも、第二の理由と同じように、第2版以後における、他の著述との強い呼応、調整の必要からなされたことであろう。

以上は、とくに目立った形式上の点であるが、内容的にみた場合、あつかう主題の増加、あつかう角度の変化というものは見られると言って良い。ただ、主題のとりあげ方に問題があると思うので、ここでは第1版のみについて、分析を試みておこう。⁽⁹⁾

第1版エッセイを構成する10編の主題を列挙してみると、①学問・研究、②談話・会話、③礼儀、④追従者・友人、⑤依頼人、⑥出費、⑦健康、⑧名誉・評判、⑨党派、⑩交渉があげられる。一見すると、きわめて日常的な問題、つまり先にふれた、「人々の生活と、その筆が一番親しんでいるもの」がとり上げられていることに気づく。「書物には珍しく、体験」に発する人生の問題が、きわめて冷静に観察され、しかもそれぞれに対する正確な認識の下に、きわめて控え目な教訓が与えられているのを見ることができる。

最近の研究ではないが、R・S・クレーンの研究⁽¹⁰⁾の助けを借りて、以上の項目の主題を考察してみると、意外にも以下の解釈が可能になる。実は後の『学問の前進』における政治哲学(civil knowledge むしろ社会哲学)のあつかう3つの部門として、A行儀または会話の知恵(wisdom of the behaviour or conversation)、B仕事または交渉の知恵(Wisdom of bussiness or negotiation)、C国家または統治の知恵(Wisdom of state or government)が上げられているが、文字通り、②と③がAの知恵に重なり、⑧と⑨と⑩がBに対応している。さて、残りの主題はどうかといえば、①と⑦は著作家、思想家哲学者たるベーコン個人⁽¹¹⁾にとっての第一義的な関心事であるはずであり、また⑤は弁護士政治家ベーコンの実務にとっての関心事である。また、④と⑥は社会人としての共通の一般的関心とは言えまいか。

これを見ると、10のテーマは必ずしも、「とりとめのない瞑想」の主題、「気晴し」の主題どころではなく、ちゃんとした根拠から取りあげられていることが理解できる。言わば、10のテーマの背後には、ベーコン個人の最大の関心という出所と、もう一つは後に大成する政治哲学の構想があったことを見逃してはならない。現行の『エッセイ』の副題たる「公私にわたる忠告」⁽¹¹⁾(Counsels, civill and marall)がいかに、『エッセイ』の真意を物語っているかが分る。ついでに言えば、実はこのサブ・タイトルがつけられたのは、第3版が始めである。ここにも、ベーコンの調整⁽¹²⁾を認めることができる。もう一つの別の例を上げておこう。第1版エッセイの第1篇「学問について」(Of Studies)の最後のアフォリズムは、「歴史は人を賢明ならしめ、詩人は才気あらしむ。また、数学は鋭敏ならしめ、自然哲学は深遠ならしめる。また、道徳は荘重にし、論理学と修辞学は論争を可能ならしめる。」と書かれる。ここには、ベーコンの学問のすすめと彼の学問観が見られ、また『学問の前進』の学問論のはしりを看取することができる。

「1597年のエッセイは、モンテーニュがすでにあたえた術語としてのエッセイではなく、16世

紀全ヨーロッパによく知られ人気のあった一ジャンルであるマキシムと金言 (maxim or “sentences⁽¹³⁾”)の集成としてのエッセイとして認められる。」というように、この作品はイギリス文学の一ジャンルとしてのエッセイの先駆という名誉を有するかも知れないが、その形式からすれば、決して新味のある文学を生み出したわけではなく、むしろ、その表現における文学力とその背景における哲学的英知にこそ、その価値があったといえる。

このようにみえてくると、この作品の内容は、彼の倫理思想としてそのまま寄与するわけではなく、むしろその先験的実例であり、「塩の粒」と言われたごとく、むしろあまりにも断片的にすぎたものである。しかし、反面から言えば、後になって整理確認される彼の学問論・倫理思想という背景の部分的実例、あるいはそれらの部分的エッセンスの彫たくの試みと見ることもできる。つまり、ベーコンにとっては、別に人間哲学の構想が徐々に進行しており、その局部的テーマが、どちらかと言えば、断片的部分的に個々に追求されたもの、それが『エッセイ』に集められた、といえる。したがって、『学問の前進』にも多くの断片が供給され、又逆に組織的な見取図としての『前進』が完成された暁には、逆に訂正増補という形で、『エッセイ』に対する強い調整が計られたといえる。ともかく、『エッセイ』は決して純文学の作品として、単独に成立するものではない。他の著作と十分に関連しながら、ベーコン思想を支えているものである。故に、『エッセイ』は文学の書ではあるが、同時に道徳の書、倫理の書と見なければならない。

P・ロッシも言っている、「『エッセイ』すら気晴らしの文学ではなく、『大革新』の一部であって、事実『学問の進歩』の付録なのであり、想像力を実践理性に従わせる方法の研究なのである。……『エッセイ』はベーコンの不屈のエネルギーの最高の部分を多年にわたってささげた人間の学問に対する、別の面の貢献として意図されたものなのである。」⁽¹⁴⁾

処女作の第2作品は、ラテン語で書かれた『宗教的瞑想』(Meditationes Sacre. Religious Meditations)である。これは、評題の示すごとく、12の宗教論よりなる、短篇であるが、そのテーマは慈愛(Charitas, charity)であり、それは決して近代的慈善ではなくして、兄弟的慈愛・近代的博愛であるべきだと論じられ、またキリストの奇跡についても、「彼のすべての奇跡は、人間の肉体の利益のためであり、彼の理論は、人間の魂のものだ」と言われていて、きわめて人間的な、博愛の愛の教えがうたわれている。これも、ベーコンを一貫する博愛的人道主義的理念である。

第3作品は、『説得と諫止の場所』(Places of perswasion and disswasion)という表題をもつものであるが、実はこれは『善悪のとりつくろいについて』(Of the Colours of Good and Evil; a fragment)という題目の作品と同じものであった。ここでいう「とりつくろい」(Color)とは法律用語で、真実の善悪について、紛飾したりまたいいつくり議論のことを問題としているわけで、そのさいの詭弁とその論破を主題にするものであり、後の『学問の前進』でも、とりあげられ、さらに前進の増補改定版であるラテン語の『学問の尊厳と進歩』(De dignitate et augmentis Scientiarum 普通は De Augmentis Scientiarum)においても12の実例が論じられている同質の問題である。この問題はベーコン自身が弁護士の実務の必要から、弁護のテクニックを追及したものであるし、さらには倫理学と論理学の接点としての修辭学の問題への関心から

生まれてきた問題追求といえる。

とまれ、以上の処女出版にとりあげられた三つの作品を通じて言えることは、第3作品は少しニュアンスを異にするものの——それでも修辞学は論理学と倫理学の交錯する接点で成立する学問であった——直接倫理思想の展開とまでは行かぬが、広義の人倫的関心の所在を否定することはできない、いなむしろ少くとも公衆の前に思想家としてのベーコンは、はじめてとまった書物の上では、まだ完全に熟しているとはいえないものの、広義の倫理思想家、いや少くとも、きわめてヒューマニスティックな愛の倫理を説くモラリスト・ベーコンとしてであった、と言わねばなるまい。

(1) 処女作の表題は次の通りである。

Essays. Religious Meditations. Places of perswasion and disswasion, Seene and allowed.
Works VI, PP. 521~534

(2) J. Spedding, *The Letters and the Life of F. Bacon*, 1868, vol. IV, P. 340 (Works XI) (成田成寿訳『ベーコン』61頁 世界の名著20 中央公論社 昭和45年)

(3) J. Spedding, *ibid.*, vol. VII. P. 374 (Works XIV) Letter to Lancelot Andrews, 1622.

(4) 成田教授は、これを「そこはかとなき思いごと」と訳されている。成田成寿『Bacon's Essay』ix頁 英文学叢書 研究社 昭和23年

(5) (2)と同じ。

(6) 現行より一篇少ない。現行本には、ローリーによって発見された「噂について」(未完) Of Fame が加っている。

(7) F. Bacon, *The Advancement of Learning*, P. 405, 1605, Works III

(8) F. Bacon, *ibid.*, P. 405.

(9) エッセイ全体の分析は、稿を改めて、別に論じたいと思う。

(10) R. S. Crane, *The Relation of Bacon's Essay to his program for the Advancement of learning*. PP. 272~292. (B. Vickers, ed. by, *Essential for the study of F. Bacon*, 1968, Sidgwick & Jackson, reprinted from *The Schelling Anniversary Papers*, New York, 1923, PP. 87~105.

(11) 一応「公私にわたる」と訳したが、ベーコンにとって、>moral<は個体的人間にかかわることであり、一方の>Civil<は社会的人間にかかわることである。精しくは、>moral Knowledge<、>Civil Knowledge<の何れにも、という意である。

(12) エッセイには、ここに上げた三つの版本以外に、1つの草稿がある。(ref. A. W. Green, *Sir F. Bacon*, P. 78. 1966, *Twynne's English Authors Series*) これら全ての副題のみを上げておくと、第1版には>Seened and allowed<とただあるだけで、草稿(1907年)には、>Moralitie, Politic, and Historie<とある。ただし、第2版になると、サブタイトルは全く消え、第3版に始めて、上記の副題が登場している。

(13) R. S. Crane, *ibid.*, P. 283.

(14) P. Rossi., *ibid.*, P. 185, (前田訳 226頁) なお、ロッシは、「J. N. D. ブッシュの言明」と断っている。ref. J. N. D. Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century*, P. 185 Oxford, 1945. (未見)

(15) F. Bacon, *Meditationes Sacrae*, 1597, Works VII, PP. 243~254)

(16) F. Bacon, *ibid.*, P. 234 (Latin), P. 244 (English)

IV

処女作出版後1603年にいたるまでのベーコンには、ハットン未亡人への求婚の不首尾、経済的債務のための逮捕事件、エセックスとエリザベスとの不和による板狭み、やがて、エセックスの失脚と処刑、そしてついには女王の崩御という、災難と苦難の日が訪れた。女王の死（1603年3月）より、新王ジェイムズ世の即位（同年7月）にいたる約4ヶ月の間、ベーコンの胸には、不安と期待、懐古と将来への想いが去来していたにちがいない。しかも気がついてみれば、すでに40歳の坂をいくつも超えている自己を見出し、がく然としたにちがいない。ここに、ベーコンにとって、一つの精神的転機がしのびよってきた。つまり、単なる思想家ベーコンから、哲学者ベーコンへの変身であり、前期思想より中期思想への転回が、あたかも宗教家にとっての回心のよう訪れることになる。幸いに、この間のベーコンの心境を伺う資料がつわれわれに残されているので、紹介することにしよう。

第1の資料は、1603年6月3日の従弟セシル宛の書簡である。彼は言う、「わたしの野心は挫折されたと確言いたします。……わたしの野心を、いまわたしは自分のペンの上にも置いていきます。それによって、わたしは来たるべき時代の記憶と功績（*memory and merit of the times succeeding*）を保有できるであろう。」と。エリザベス時代における相次ぐ昇進の野望の挫折をいやというほど味ったベーコンの失意が、ここに徐々に、文筆をもって後代の賞讃を期する姿に変化していることを認めることができる。このような心境によってか、ベーコンの著作の中ではユニークな、自己分析的、自伝的内容の記録が生れてくる。すなわち、『自然の解明序』⁽²⁾という第2資料がそれである。きわめて興味あるものなので、長きをいとわずに、しばらく彼の言をきくことにしよう。

「わたしは人類の奉仕のために生れた（*I was born for the service of mankind*）と信じ、また、公共社会の配慮というものを空気や水と似た一種の万人の共有財産だと考えているので、人類に奉仕しうる最善の道はなにか、また本来、自分が遂行するのに最適の奉仕はなにか、ということに身を入れてきた。

さて、人類にあたえうるあらゆる利益のなかで、人間生活をよりよくするための新技術や、知的才能や、財貨ほど偉大なものはない、ということを知った。と言うのは、原始時代の未開人のあいだでは、素朴な発明や発見をした人が聖徒の列に加えられたり、神々のなかに数えられたりしたことをわたしは知ったからである。……人がある特殊な発明を発見する——いかにそれが有用であっても——のではなく、自然の中に光をともしことに成功したら……かような人は、実に人類の思人になるだろう——つまり宇宙に対する人間帝国の伝道者（*propagator of man's empire over the Universe*）、自由のチャンピオン、困窮の征服者、解放者となるであろう。

わたし自身はといえば、わたしは『真理』の探究ほど、自分に適したものはないことを知った。……わたしは、自分の天性が、真理に対して、一種の親近性、関連性をもっている、と考えた。

にも拘らず、わたしの生れや教育はわたしを国事に慣れさせたし、また人々の意見は——私は若かったので——わたしをときどきぐらつかせた……もし、わたしが国家の何らかの名誉ある地位に昇進できたら、自分の仕事を助けてくれるような勤労や能力の一そう大きな支配力を持つだろうと期待した。わたしにはもう一つ別の動機もあった。というのは、これらわたしの語った事柄は——ことの大小はともかくとして——現世の生活状態や文化以上には達し得ないと感じていたからであり、またわたしは……もし国家の官職につくことになれば、わたしは人間の魂の善のためにも、なにかを為し得ると言う希望もないわけではなかった。

しかしながら、わたしは、自分の熱中が野心と誤解されたり、また自分の人生がすでに転機に達していたり、さらに自分のそこなわれた健康が、もうぐずぐずしてはいけないということを感じさせてくれたりしているのがわかったとき、……わたしは自分に課せられた義務をけっしてまぬかれようとはせず——すなわち、わたしはこういう考えを一切ふり捨てて、自分の昔の決心にしたがい、この仕事に全力をあげてとりかかったのである。⁽³⁾

ベーコンの前期思想の到達点を、これほど見事に物語る文章は他にはない。ここに、われわれは、本格的なベーコン哲学の新たな決意をよみとることができよう。また、その基本的姿勢としての、「人類の奉仕」、「人類の利益」、「宇宙に対する人間帝国の伝道者」、「自由のチャンピオン」、「人間の魂の善のため」という、先にいった第二主題としての倫理的関心と、発明発見技術への、そしてやがては学問論理方法へと向う第一主題との相即不離なることを、われわれは確認したい。しかし、前期思想の完成は、同時に中期思想の出発である。

以上考察したごとく、初期ベーコンにおいては、一貫して強力な倫理思想——正確には、まだ倫理的関心とでもいうべきであるが——が流れている。それはまだ未定形なものであり、またそれだからこそ力強い一線として貫いているとあって良い。それは、ファリントンの言うごとく、⁽⁵⁾「倫理的・人道的・博愛的」な素朴な「倫理的楽天主義 (ethical optimism)」と言っても良いものであろう。初期思想に関する限り、「ベーコンは本来モラリストでは全くない。彼の人間性、道徳性そして宗教に関する発言は自然に関する真理と科学的探究の新方法に関する主たる関心にとって第二義なものであった。」⁽⁶⁾という、B・ウィリーの批判に対して、「ベーコンの科学に対する新しい考え方は、この社会的目的の成就にとっては、付帯的なものであり、手段的なものであった。」⁽⁷⁾というファリントンの見解をもって反論することによってこの小論の結論とし、一まず、この第一部を終えたいと思う。(第1部終り)

(1) J. Spedding, *Ibid.*, vol III, P. 80. Letter to Robert, Lord Cecil, (Works X)

(2) ラテン原文、およびその英語訳の何れも、全集に収められている。

De Interpretatione Naturae, Prooemium, (Works III. PP. 518~520)

On the Interpretation of Nature. Proem. (J. Spedding, *Ibid.*, vol, III. PP. 84~87 (Works X)

なお、スペディングによれば、これは1603年の夏に書き上げられたものといわれる。ref. J. Spedding. *Ibid.* Preface, Works III, P. 507.

(3) *Ibid.*, PP. 518~519. Works, III, (Latin). *Ibid.*, PP. 84~85. Works, X, (English)

- (4) B.Farrington, The Philosophy of F. Bacon, 1964, Liverpool Univ. Pr. P. 31.
- (5) B. Farrington, *ibid.*, P. 30.
- (6) B. Willey, The English Moralists, 1965, Oxford, P. 125.
- (7) B. Farrington, *ibid.* P. 31.